音楽学部 人文学部／人間発達学部	2025年度一般入試問題　国語	●時間／150分 ●配点／100点

一　次の文章は原田マハの「マドンナ Madonna」の一節である。主人公のあおいは絵画の売買が専門のギャラリストという仕事をしている。本文を読んで、あとの問いに答えなさい。

なんだろう、[1]母との約束を忘れているような気がする。

ふいにそう思い出したのは、[2]七月生とともに石畳の街角を歩いているときだった。

翌年の五月、あおいは七月生とともにイタリアのフィレンツェに来ていた。ヴェネチアで二年に一度開催される現代アートの祭典、ヴェネチア・ビエンナーレのオープニングに参加したあと、とあるコレクターを訪問するためにフィレンツェまで〔　A　〕を伸ばしたのだ。

前夜にフィレンツェに到着し、アポイントはその日の午前十時だった。せっかく美しい古都に来たのだから、訪問先まで歩いていこうということになった。あおいにとってフィレンツェは二度目だったが、前回の訪問は大学の卒業記念旅行だったので、ずいぶんひさしぶりだ。

さわやかな朝の日差しの中、川風に頬を撫でられながらヴェッキオ橋を渡った。橋の先のひとつめの角を曲がったところで、なんの①脈絡もなく、母のことを思い出した。正確にいえば、母と何か約束している、ということを。

訪問先の②邸宅の入り口に到着したところで、ジャケットのポケットの中でスマートフォンが鳴り始めた。画面を見ると、兄からの着信だった。あおいはしばらく画面をみつめていたが、[3]電話には出ずに、スマホをポケットにしまい込んだ。

インターフォンで呼び出そうとしていた七月生が、〔　B　〕を止めて訊いた。

「いまの電話、お母さんじゃないの？」

あおいは「いえ」と答えた。

「兄です」

「どうして出ないの」七月生が畳み掛けるように尋ねた。

「いえ、大丈夫です。ここまで来ておきながら、アポイントの時間が過ぎちゃうし……」

「電話なんて、一分あればなんの用件か確かめられるよ。大丈夫、こっちの相手はイタリア人だし。一分が待てないんなら、イタリア人やめたほうがいいから」

[4]確かにその通りだ。あおいは、その場で兄に電話をした。ワン・コールでつながった。

『あおいか。いまイタリアだってな。仕事中なんだろ？　話して大丈夫か？』

やや切羽詰まった声が、あおいをぎくりとさせた。[5]予感は的中した。

『おふくろが、きのう、転倒して、救急車で搬送された。幸い、ちょうど笹川さんが来てたときだったみたいで、入院の手続きとか、全部、笹川さんがやってくれてさ』

えっ、とあおいは短く叫んだ。となりで七月生が〔　C　〕を曇らせた。

「それで、どうなったの。兄さん、いまどこ？」

声が震えてしまった。兄は口早に状況を説明した。

『おれはさっき病院に着いて、医師に説明を受けたところだ。どうやら、まえに手術したあたり……③脊柱にひびが入ったとかで、週明けに再手術をすることになったよ』

「お母さんは？」あおいは、こわごわ訊いた。「どうなの？」

ところが、[6]意外な答えが返ってきた。

『それがなあ。ケロッとしてるんだ』

もう一度手術を受けますか、と医師に訊かれた母は、はい、と即答したという。

――もういっぺん、全身麻酔ですよ。

――はい、わかってます。

――もう一度、体にメスを入れるんですよ。

――そりゃそうでしょう。手術だもの。

――それでも、完治するかどうか、わかりませんよ。

――いいですよ、死んだらそれで寿命だもの。もう少し生きる寿命なら、生きて帰ってくるでしょ？

そんな会話があったという。だから大丈夫だ、と兄は、確信に満ちた明るい声でそう言った。

『ああいうのを、〔　D　〕が据わってる、っていうんだろうな。先生とおふくろのかけ合いじゃ、おふくろのほうにだんぜん説得力があったよ。だから、きっと大丈夫だ。お前、あさって帰国だよな。手術は週明けだから、間に合うよ。おふくろの好きそうなドルチェ[注1]でも買ってきてやってくれ。きっと喜ぶぞ』

前向きに締めくくって、兄は通話を切った。

「なーにが。ドルチェとか言っちゃって……」

無意識につぶやいた。ほっと力が抜けた。が、スマホを持つ手がずっとぶるぶる震えている。その様子を見て、「どうしたの」と七月生が声をかけた。

「お母さんに何かあったの？」

あおいは、母が転倒して入院したこと、再度手術を受ける決心をしたらしいことを七月生に伝えた。七月生は、黙って聴いていたが、

「わかった。じゃあ、橘さん（たちばな）はとにかく、いったんホテルに戻って待機して」

と言った。

あおいは、「いえ、私もミーティングに参加します」と突っ張った。

「そのためにここまで来たんですから……」

「橘さん、動揺してるよ。そんなとこ、相手に見せちゃまずいでしょ。とにかく、落ち着いて、お昼までには私もホテルに帰るから」

七月生に背中を押されて、あおいはしぶしぶ歩き出した。

――相田さん、ぜんぶ、お見通しなんだな。

確かに動揺していた。七月生の言った通り、ビジネスの話をするには最低のコンディションである。ここはおとなしく引き上げたほうが無難だと、あおいは悟った。

ヴェッキオ橋を渡りながら、ほんの十分後の運命ですら人は知ることができないものなんだな、とつくづく思った。

十分まえには、〔　E　〕を躍らせながらこの橋を渡ったのに、まさか急転直下[注8]、十分後に胸に不安を抱え込んでひとりで帰るなんて、予想もしなかった。

母も、きっとそうだろう。笹川さんとお茶を飲みながら楽しくおしゃべりしていたに違いない。そのほんの十分後に救急車で搬送されることになろうとは、どうして想像できただろうか。

あおいは、ヴェッキオ橋の真ん中あたりに佇（たたず）んで、滔々（とうとう）と流れるアルノ川を眺めた。朝の光をまぶしく弾（はじ）く川面（かわも）をみつめて、あおいは目を細めた。

――死んだらそれで寿命だもの。

兄に聞かされた母の言葉が、まるでさっき直接聞いたかのように、あおいの耳の奥で響いていた。

ホテルへ帰って、ひとりになるのが怖かった。余計なことを考えてしまいそうで。

橋の上にずらりと軒を並べる宝飾店のショウウィンドウを見るともなしに眺めながら、あおいの足は、いつしかどこかへ――ウフィツィ美術館へと向かっていた。

学生時代、胸をときめかせながら訪れた美術館。一度は見たいと思っていたボッティチェリの〈ヴィーナスの誕生〉を目にした瞬間に感じた、あのまばゆさ。

――もう一度見にいってみよう。

が、入り口には長蛇の列ができていた。入場までに一時間以上はかかるとわかって、あきらめた。[9]会いたかった友につれなくされたような、しょっぱい気持ちが広がった。

だったら、とあおいは気を取り直した。行ったことのない美術館へ行ってみよう。フィレンツェは美の宝庫なのだ。いくらでも見るべきものはある。

そうして、あおいが訪れたのはパラティーナ美術館だった。

十六世紀に建てられたピッティ宮殿の一角、石造りの④荘厳な建物である。いかにも固い[注2]ファサードからは想像もできないほど、内部には華麗な装飾の部屋が次々に連なり、壁という壁に、ルネッサンス期からバロック、ロココまで、各時代の絵画がところ狭しと飾られている。

四方を仰ぎ見て、あおいは、わあ、と声には出さずに心の中で歓声を上げた。

もう長いこと、美術業界の第一線で仕事をしている。いまや日常的にアートに接しているのに、初めての美術館に足を踏み入れた瞬間のときめきは、少女の頃からちっとも変わっていない。

ひとつひとつ、じっくりと、というよりも、空間ごとの絵画を体感しながら、あおいは奥へと進んでいった。ときおり、あっと驚くような有名な絵が飛び込んでくる。美術書で見たことのある名画が、ここにあったのか。いつしか夢中になって、あおいは[10]美の迷宮をさまよった。

そして――。

見覚えのある一枚の絵の前で、あおいの足がぴたりと止まった。

漆黒の中に浮かび上がる、光り輝く聖なる母と子。微笑をうっすらと口もとに点(とも)して、⑤慈愛に満ちたまなざしを我が子に注ぐ、そのうつくしい姿。

あ。これは――。

――ラファエロの〈大公の聖母〉だ。

あおいは、光のヴェールに包まれた聖母(マドンナ)と幼子イエスの像を前にして、[11]記憶の川をさかのぼる小舟に乗った。

遠い日、母の仕事机の前に貼られていた一枚の切り抜き。古雑誌の一ページに載せられていた写真の切り抜きである。

捨てればいい、けれど捨てるのが惜しくて、マドンナを壁に貼り出した母。娘にみつけられて、なんだか照れくさそうだった。

――お母さん。

あおいは、胸のうちで呼びかけた。

――思い出したよ、約束。

[12]今度、帰ったら……ハーモニカ、直しに出すからね。

あおいの目に、ふいに涙が込み上げた。同時に、うふふ、としょっぱい笑いも込み上げた。

（原田マハ「マドンナ Madonna」による。一部改変。）

注1　ドルチェ……イタリア語で「甘味」を意味する、甘い菓子。

2　ファサード……建築物の正面部分のデザイン。

問一　二重傍線部①～⑤の漢字の読みを書きなさい。

問二　空欄〔　A　〕～〔　E　〕に入る語として最も適当なものをそれぞれア～オの中から選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

ア　眉　　イ　手　　ウ　胸　　エ　腹　　オ　足

問三　傍線部1「母との約束」とは何か。本文中の記述を使って、十五字以内で書きなさい。（句読点は字数に含む）

問四　傍線部2「七月生」をフルネーム（姓名）で書きなさい。

問五　傍線部3「電話には出ずに、スマホをポケットにしまい込んだ」とあるが、あおいがすぐに電話に出なかったのはなぜか。その理由として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　海外で日本からの電話を受けたくなかったから。
イ　長らく兄とは連絡を取っていなかったから。
ウ　母に関する報告は聞きたくなかったから。
エ　大事な商談に遅れたくなかったから。

問六　傍線部4「確かにその通りだ」とあるが、何が「その通り」なのか。その説明として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　家族だからといって電話を無視するのはよくないということ。
イ　イタリアではイタリア人のルールに従うべきだということ。
ウ　用件を聞くだけなら電話に出ても短い時間で済むということ。
エ　訪問相手と会う時間を約束しているわけではないということ。

問七　傍線部5「予感は的中した」とあるが、「予感」とは何か。その説明として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　このまま母との約束は果たせないのではないかという予感。
イ　時間に遅れて商談がうまくいかないのではないかという予感。
ウ　母に何かよくないことがあったのではないかという予感。
エ　兄の電話は用件だけでは済まないのではないかという予感。

問八　傍線部6「意外な答えが返ってきた」とあるが、なぜ「意外」だったのか。その理由として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　母が再手術を深刻に受けとめているのではないかと心配したが、動じていない様子だというから。
イ　兄に母のことを任せるのは不安だと思っていたが、病院にかけつけ医師の説明を受けたというから。
ウ　母は意識が戻っていないと思っていたのに、医師と会話できるくらいに回復しているというから。
エ　医師は手術しても完治するかどうかわからないと言っているのに、再手術を受けるというから。

問九　傍線部7「なーにが。ドルチェとか言っちゃって……」と言ったときのあおいの心情を説明したものとして、最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　母の怪我に動揺している自分と違い、しゃれた言葉を使って母に土産を買ってきてやれという兄がのんきに思えた。
イ　イタリアでの仕事を終えて帰国したばかりの妹に、母の手術に立ち会うよう指図する兄が憎らしく思えた。
ウ　母のことを忘れていた自分にわざわざイタリアまで電話をくれ、母の容態を知らせてくれた兄に感謝を覚えた。
エ　母の一大事にもかかわらず、妹がイタリアにいるからといって普段使わない言葉をあえて使う兄にいらだちを覚えた。

問十　傍線部8「急転直下」とはどういうことか。ここでの意味を説明した次の文の空欄 Ⅰ と Ⅱ に入る語を書きなさい。

あおいは久しぶりにフィレンツェを訪れ、さわやかな朝に美しい古都が歩けて Ⅰ いたが、兄からの電話で母が救急搬送されたことを知り、 Ⅱ のコンディションになったということ。

問十一　傍線部9「会いたかった友につれなくされたような、しょっぱい気持ちが広がった」とは、ここではどういうことか。その説明として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　兄の電話による動揺を隠せず、七月生だけに仕事をさせることになってしまい落ち込んだということ。
イ　かつて訪れたウフィツィ美術館をもう一度見たかったが、人が多くて入れず残念に思ったということ。
ウ　絵を見て気分転換がしたかったのに、人だかりがしているので絵を見るのが嫌になったということ。
エ　七月生もウフィツィ美術館を見たいと言っていたので、自分だけが行くのは後ろめたかったということ。

問十二　傍線部10「美の迷宮」とは具体的にはどこを指すか。本文中より抜き出しなさい。

問十三　傍線部11「記憶の川をさかのぼる小舟に乗った」とはどういうことか。その説明として最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　先ほどは思い出せなかった母との約束の内容をようやく思い出したということ。
イ　絵を見ることに夢中になって忘れていた母の再手術を急に思い出したということ。
ウ　記憶が曖昧だったラファエロの〈大公の聖母〉を細部まで思い出したということ。
エ　母が仕事机の前にマドンナの絵を貼っていた昔のことを思い出したということ。

問十四　傍線部12「あおいの目に、ふいに涙が込み上げた。同時に、うふふ、としょっぱい笑いも込み上げた」とあるが、この時のあおいの心情を説明したものとして、最も適当なものをア～エから選び、符号で答えなさい。

ア　母との約束を果たさなければならないのに、絵を見て楽しんでいる場合ではないと思った。
イ　絵を通じて母への愛情が呼び起こされ、なおざりにしていた母との約束を果たそうと思った。
ウ　死を意識した母の言葉を知って悲しみを覚え、母との約束を果たすのは今しかないと思った。
エ　日常的にアートに接している喜びを感じるとともに、母との約束だけは果たしたいと思った。

二　次の問いに答えなさい。

問一　①～⑩の傍線部のカタカナにあてはまる漢字をア～コから選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

① 世界記録をコウシンする。
② 飛行機が着陸のためコウカする。
③ コウケツな人物として知られる。
④ 漢方薬のコウノウがあらわれる。
⑤ 雑誌に小説をトウコウする。
⑥ 先人のコウセキをたたえる。
⑦ 私費ではなくコウヒをあてる。
⑧ 文章にギコウをこらす。
⑨ 事典のコウモクを立てる。
⑩ 著名人のコウエンを聴く。

ア	高	イ	効	ウ	項	エ	功
オ	講	カ	更	キ	巧	ク	公
ケ	稿	コ	降				

問一　①～⑤と反対の意味を持つ語をア～コから選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

① 散漫　② 柔和　③ 空虚　④ 派遣　⑤ 騰貴

ア 穏健	イ 下落	ウ 険悪	エ 指名	オ 充実
カ 集中	キ 召還	ク 粗雑	ケ 怠慢	コ 放棄

問二　①～⑤の傍線部の用法としてア～イから適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

① ア　優勝が決定してクラス全体が浮き足立つ。
　 イ　景気の先行きに不安を感じて浮き足立つ。

② ア　仕事中に面白いエピソードを思い出して失笑した。
　 イ　歓談中に演奏が始まり会場にいる全員が失笑した。

③ ア　仕事を手伝うのはやぶさかでない。
　 イ　依頼を断るのはやぶさかでない。

④ ア　声を押し殺して号泣する。
　 イ　人目をはばからず号泣する。

⑤ ア　議論が煮詰まったので採決することになった。
　 イ　会議が煮詰まったので結論を出すのを諦める。